

# 既成概念にとらわれず、 近世ドイツの実像を 世に提示したい



Navigator

文学部 / 西洋史学専攻

# 鈴木直志

教授

Tadashi Suzuki

鈴木直志 (すずき ただし)

1967年1月、愛知県生まれ。

愛知県立名古屋西高等学校卒業。中央大学文学部史学科卒業。中央大学大学院文学研究科修士課程修了。同大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。桐蔭横浜大学法学部教授等を経て2014年より現職。

## 中央大学での 恩師との出会いが人生の転機に

鈴木先生の出身地・愛知県は、織田信長や豊臣秀吉、徳川家康を筆頭に、歴史的な人物との関わりが深い地域である。そこで育った先生は幼い頃から歴史に親しみ、「歴史好き」として成長していった。高校の世界史の授業を通じて西洋史、特にドイツに関心を抱き、中央大学文学部史学科に進学。当時からドイツ史を専攻しようと考えていたそう。

史学科で阪口修平教授(当時)に出会ったことが人生のターニングポイントになったと先生は言う。「阪口先生には、ドイツ語の文献講読を行う3年次の演習の時から本格的にお世話になり、時にはマンツーマンで手ほどきをしていただくほど細かな指導を受けました。阪口先生は学生の志向や資質をじっくり見て、それを伸ばす教育をされる方でした。先生は研究者として、また教育者として、つねに私のお手本です」そして大学院へ入学した先生はドイツ史の中でも、阪口先生がいち早く手がけていた「ドイツ近世(主に18世紀)の軍事史」を研究の主軸に定めていった。中央大学入学から約30年後、先生は恩師・阪口先生の研究を引き継ぐ形で西洋史学専攻の教授に就任した。

先生はご自身の専門を「広義の『軍事史』」と言う。「狭義の軍事史では、戦術や戦略、軍事技術など軍事そのものの歴史をたどります。もちろん

そうしたものも含むのですが、私が研究しているのは、軍隊や戦争といった事象と国家・社会との関連。つまり、軍事を歴史学の視点で見つめるのです」国家や社会の変化に伴って、軍隊や戦争はどのように変わるか。またその反対に、軍隊や戦争が国家や社会にどのような影響を及ぼすのか。先生はそういった軍事と国家・社会との関わりを、近世ドイツを舞台に追究しているのだ。

## 近世ドイツの軍事史― 君主の私兵から国民の軍隊へ

では、近世ドイツの軍事はどのような状況だったのだろうか。「ドイツの前身ともいえるプロイセンは、いわゆる絶対主義の時代(17世紀半ば〜19世紀初頭)に急成長を遂げました。17世紀後半に建設された常備軍にプロイセン独特の性格を与えたのは、1713年に即位したフリードリヒ・ヴィルヘルム1世(軍人王)です。彼の時代に軍隊は急増し、行財政の集権化が推し進められました。その行政機構は、当時のヨーロッパ諸国の中でおそらくもっとも集権的、合理的だったと思われます」息子のフリードリヒ2世(大王)は、父が育てた軍隊で、プロイセンを一躍ヨーロッパ列強の一つへと押し上げた。この目を見張る成功の鍵は、軍事力の強化をてこにした国家行政の整備にあった。それゆえプロイセン絶対主義国家は「軍事官僚国家」とも呼ばれるそう。



恩師の「ドクター・ファーザー(ドイツ語で指導教授の意)」阪口修平先生と。先生は阪口先生を人生の父とも仰ぐ。

国王が統治する近世ヨーロッパの軍隊は、いわば「君主の私兵」であった。また絶対主義時代の常備軍では、兵士を集め、彼らの衣食住をまかなうのに莫大な費用がかかったため、訓練の行き届いた兵士というのは大変高価で貴重な存在だった。「それゆえ、当時の野戦では、この高価な兵士を失わないために正面攻撃を避ける傾向にありました。兵力を損なわずに機動力を駆使して有利な陣形をつくり出し、和平交渉を持ち込む将軍が優秀とされたほどです。つまりこの時代の戦争の多くは、限られた目的のために、限られた手段で戦われたのです」

ところが、フランス革命・ナポレオン戦争(1792〜1815)を機に、ヨーロッパにおいて軍事事情が変化していく。「この戦争を経る中で、君主の軍隊が国民の軍隊へと変わっていきました。それまでは君主の募った志願兵によって戦われていたが、今や義務として兵役についた



先生の研究室は以前阪口先生が使っていたものと同じ部屋。先生はまさにこの場所で恩師から指導を受けていた。

国民が戦いの主体になったのです。そして、これまで戦争を制限していた様々な条件がなくなると、戦争は士気の高い大規模軍隊が互いに激突する、仮借なき戦いになっていきました」フリードリヒ大王の時代に強国となったプロイセンはその後継曲折を経て、1871年にドイツ帝国をもたらし、君主制は第1次世界大戦終戦（1918年）まで続くが、19世紀のドイツでは、軍隊は君主のものでありながら国民の軍隊でもある、という性格を強く持つようになっていった。

### プロイセンの軍国主義がヒトラーを生み出したのか？

ドイツ史において大きなトピックとなっているのが、ナチス・ドイツ（1933～1945）とその指導者ヒトラーである。何がナチス・ドイツ成立の要因となったのか。歴史学ではこれまで、しばしば「ヒトラーのルーツ探し」が行われてきたという。プロイセンの軍国主義がヒトラーの出現につながった、とする言説も

多い。絶対主義時代以来、プロイセンでは軍隊の存在があまりにも大きく、その影響が政治や社会の隅々まで行きわたった。その結果、自由な民主主義社会が育ちにくくなり、最終的にヒトラーの独裁国家をもたらした、とする考えである。しかし、それは歴史のある一面を過度に強調したものではないかと先生は指摘する。「19世紀はともかく、近世のプロイセンをヒトラーと直結させるのは適切ではないでしょう。近年のヨーロッパ近世史研究では、これまでプロイセン軍事国家の対極と考えられてきた18世紀のイギリスが「財政軍事国家」と呼ばれるようになっていきます。つまり、軍事国家は決してプロイセンの専売特許ではなく、大なり小なり近世ヨーロッパ諸国の共通現象だったということです。今から思うと、18世紀のプロイセンを極端な軍事国家として描き、その否定的なイメージに強い説得力が備わったのは、それが第二次世界大戦でドイツがヨーロッパ全体に多大な被害を与えた戦争―後まもない時代の価値観の反映だったからかもしれません。歴史には、それを語る時代の価値観が大なり小なり必ず紛れ込んでいる。歴史研究には、その点に対する意識が欠かせないと思います」

既成概念にとらわれずに近世プロイセンの歴史を解き明かし世に提示していきたい、と先生は意気込みを語った。

学生時代に絆を育み  
充実した人生につなげてほしい

先生の話はとても熱意に満ちている。その「熱さ」は講義でもいかになく発揮されるが、高校までに習ってきたものとは異なる視点から歴史を検証する内容も多く、学生は興味をもって聞いていくられるようだ、と先生は言う。講義後には学生にコメントペーパーを提出してもらっているそうだ。これは疑問や質問、意見を自由に書いてよいもので、次回の講義で先生がコメントをいくつかピックアップしてレスポンスする。先生はこうしたスタイルで、双方向性を大切にした講義を行っている。一方ゼミでは、文献の集め方や読み解き方、学術的な文章の書き方など、卒業論文を仕上げるための技術的な指導が中心。意欲ある学生には個別にドイツ語の手ほどきも行っているという。

大学での学びを通じて、学生にどんなことを身に付けてほしいか。中央大学での出会いが現在につながっている先生に、先輩としての思いを伺うと、「よく学びよく遊び、よく食べてよく語ってほしい」と、肩の力を抜いた答えが返ってきた。「もちろん学問は大切ですが、部活やサークル、ボランティア活動などを通じて、絆を育んでほしい。それを起点に、お金には代えられない財産をつくってもらえたら、と思います」こんなことを改めて言うと思えますね、と先生は笑って言葉を締めくくった。

2014年9月取材当時



## “Close up,”

現在の研究テーマを教えてください  
ドイツ近世史、広義の軍事史

### ご趣味は？

クラシック・ロックと呼ばれる1960～80年代のロック音楽を聴くこと。特に好きなのはThe Who、The Doobie Brothersなど。また、ラーメンやおそばなどの食べ歩きも好きです。

### どんな高校生でしたか？

友人と楽しく、にぎやかに過ごしていました。真面目に勉強していたかどうかはナイショです。

### 高校生の頃の夢は？

漠然と「学校の先生になりたい」と思っていました。まさか大学の教員になるとは思っていませんでした。

### お薦めの本を3冊あげてください

- 『学問のすすめ』  
福澤諭吉（岩波文庫）
- 『道をひらく』  
松下幸之助（PHP文庫）
- 『ゲーテとその時代』  
坂井榮八郎（朝日選書）

いずれも、内容はもちろん文体も素晴らしい。福澤諭吉は小気味よく、平易かつストレートに道理を説きます。松下幸之助の言葉もまた平易で飾らず、人の心を清らかにします。坂井先生の本は、歴史を観る透徹した眼力と妬ましいまでの文体が、常に私の手本になっています。

### 先生にとっての“特別な一冊”は？

『スイス傭兵ブレイカーの自伝』  
ウルリヒ・ブレイカー（刀水書房）

自分の名前が入った初めての書物であり、翻訳の仕事を通じてお師匠様の阪口先生から多くの教えを授かったこと、が理由です。

### 高校生へメッセージ

「物質的な豊かさだけでは人は幸せになれない」と言われて久しいものの、いまだにわが国で

は即物的な生き方に高い価値が置かれている気がします。そんな中、多くの時間を議論や思索、読書に費やし、自分と社会を深く見つめることも少なからぬ意義があると思います。



幅広い視点で選んでいただいた3冊。先生は現在もこれらの本に親しんでいる。



阪口先生と、深夜1時まで訳文の検討をしたこともあるという思い出深い1冊。